≪特集：2019 年度日本薬学図書館協議会 中堅職員研修会≫
参　加　記

2019 年度日本薬学図書館協議会
中堅職員研修会・参加記

豊　島　啓　子*

2020 年 2 月 7 日（金）に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された日本薬学図書館協議会による 2019 年度中堅職員研修会に参加した。

今回の研修テーマは「雑誌の評価と論文の評価―業績評価指標の今後」で，3 名の講師から業績評価指標を取り巻く状況や今後の展望などについてご講演いただいた。

業績評価指標としてまず思いつくのは Impact Factor であり，研究者にとって論文の投稿先を決定する際の重要な指標となっているが，近年その問題点が指摘されるようになってきている。一方，IT 技術の進歩により論文単位での評価指標である Altmetric や研究者自身の評価指標 H-index など新たな評価指標も生まれてきている。今回の講演はこれら新しい可能性を持つ業績指標との今後の関わり方やそれに代わる評価の可能性などを考える良い機会になった。以下に講演の内容を報告する。

1.　F1000 - 研究者による学術論文の発見と評価，発表のためのプラットフォーム

株式会社サンメディアの伊藤ミナミ氏からは，論文評価システム「F1000」を利用し，近年増え続ける膨大な量の論文の中から研究者が重要な文献を発見することで効果的な研究をサポートする方法についてご紹介いただいた。

近年の急激なオープンアクセス（OA）論文の出版増により 1 年間に発表される論文数も増加し，アクセス可能な情報量が増えることでより多くの論文を入手できるようになっている反面，いわゆるハゲタカジャーナルも多く出版されるようになり，研究者にも質の良い論文を見分ける力がますます必要となってきているとのことだった。

今回紹介された論文評価システム F1000Prime には Impact Factor（IF）ではなく Altmetric が採用されており，その理由として「研究評価に関するサンフランシスコ宣言（DORA）」に記載されているように IF はもともと図書館員が雑誌を購入する際の指標として用いられていたもので，論文そのものの評価指標としては多くの欠点が指摘されているが，Altmetric は論文単位の評価指標であり，『論文のインターネットでのさまざまな反響（ソーシャル・アテンション）を数値に換算した指標』であるため，研究者にとっては自分の研究（論文）の社会的影響などが即座にフィードバックされるという利点があることを挙げられた。

Altmetric については論文検索の際に目にする機会はあったものの，恥ずかしながら詳しく調べたことがなかったので，IF の役割を再認識するとともに，業績評価指数の理解を深める良い機会となった。ほかにもオープンアクセスで投稿できる出版プラットフォーム F1000Research などについてもご紹介いただいたが，IT 技術を活用した同様のサービスが増えることで「情報収集→研究→論文執筆→発表」のサイクルが効率良く進み，より質の良い研究成果を得られることにつながる可能性を感じた。

2.　学術論文発表と研究評価を取り巻く環境の大変貌 ～オープンアクセスがもたらすパラダイムシフト～

国立情報学研究所 情報社会相関研究系 准教授の船守美穂氏からは学術論文発表と研究評価を取り巻く歴史として大手出版社の台頭や OA 論文の増加，出版体系の変化についてご講演いただいた。その内容は急速なデジタル化の進歩による学術論文や研究データのオープン化につながる背景や，ハイブリッドジャーナルのダブルディッピング問題解消のための海外大手出版社の完全 OA 移行への動き，それに対する解決策など，様々な資料と共にグローバルな視点から詳細に解説いただいた。過去に何度か電子ジャーナルの歴史について勉強したことはあるが，オープンアクセス化の動きの発端が重病医療患者からの抗議だったことや，メリットだけのように考えていた大量データに容易にアクセスできることへのデメリット，社会が及ぼす学術界への影響など，様々な視点から語られる情報に新鮮な驚きと共に表面的な事象だけに注目することの危険性を認識した。

* Keiko TOYOSHIMA
城西大学水田記念図書館
〒350–0295 坂戸市けやき台 1–1
E-mail : ktoyoshima@stf.josai.ac.jp

特に印象的だったのはデジタル時代の研究に及ぼす弊害に関する話題で，出版論文数の増加は先進国の査読疲れ，研究評価を得るための論文乱造による研究の質の低下，ひいては学術業界の崩壊につながる危険性があるとのことだった。本学では学生向けに外部講師を招聘し研究倫理や英語論文執筆に関する講演会を行っているが，その中で研究者による研究データの捏造，改変，論文執筆に関する信じられないような不祥事についての話を聴くことがあるが，それらもこうした弊害の一つといえるのだろう。

最後に，船守氏の話の中で研究者にとっての「学術論文」に関して，印象に残った表現が2つある。一つは『「学術論文は研究者として認められるための媒体であり，論文が残らなければ存在しないのと同じ」，もう一つは『Publish or Perish - 出版せよ，さもなくば滅びよ』という言葉である。今更ながら研究者にとっての「論文」やその研究成果の重要性を改めて強く感じる言葉だった。

今回，船守氏はナイジェリアから帰国後すぐの講演だったにも関わらず，研究者の置かれている現状や今後の業界の動向など精力的にご講演いただいた。時間が足りなくなり途中説明を割愛されてしまった箇所もあったが機会があれば是非続きを聴講したい。

3.　雑誌の評価と論文の評価―業績評価指標の今後

国立遺伝学研究所 生命ネットワーク研究室 室長（教授）有田正規氏からは生命科学分野の最先端機関に所属する研究者ということで，図書館員が普段あまり聴く機会のない話題を交え，業績評価システムの仕組みや研究員が論文の投稿先を選択する際に知っておくべき情報，将来的に各業界に対し期待する役割などをご講演いただいた。

個人的に最も興味があった，雑誌契約の際に参考情報として利用しているCOUNTERについては，出版社の記事の表示方式によってカウント数が大きく変化することやその計算方法の内訳が明らかにされていないことなどから盲目的に信頼することについての危険性が示唆され，自身が以前から抱いていた疑問を解消していただいた。

Impact Factor（IF）についても出版時期の違いで数字を操作できることに加え，近年の中国系雑誌の台頭のように国策として科学を『管理』できる時代においてはIFの操作もある程度可能であることなど，さらに多くの問題点を含む現実を知ることができた。

これらを踏まえ，研究者が投稿雑誌を決める際の基準について研究者や図書館員が各出版社の成り立ちやポリシーを知ったうえで論文の投稿先を決めることの重要性に関連して，Public Library of Science（PLOS）が商業出版社による知識の囲い込みへの反発から設立されたこと，eLIFEのポリシーが打倒「Nature」であったことなどをご紹介いただいた。

これまで各出版社の設立ポリシーなど気にしたことがなかったが，OA出版の増加に紛れてハゲタカジャーナルとの境界線が曖昧になりつつある今，それぞれの出版社の成り立ち等を知ることは今後さらに重要になると感じた。その他，学術出版社が圧倒的不利であるはずのオンライン化を乗り切ってきた経緯，欧州でのFAIR Dataの考え方と日本の現状など，今後のオープンサイエンス，オープンデータへの対応を考えるうえで大変参考になる内容ばかりだった。

最後に「データマネジメント」が重要であること，そのために研究者自身がIFのような従来の評価基準に縛られることなくそれぞれのソサイエティで学会誌を発行し持続可能な運営体制を確立すること，図書館や大学に対しても新たな役割を期待する言葉で講演を締めくくられた。有田氏の期待する「本屋大賞」のような新しい仕組みを作ることも既存の評価指標や出版社依存から脱却するための手段の一つかもしれないと考えさせられた。

本研修の登壇者3名はそれぞれ違う立場での講演だったが，いずれの講演もおのおのの知見や精力的な活動に基づいた内容で大変勉強になった。これからもIT技術やAIの発達等により論文だけでなく研究データなど多様な情報のオープン化が加速度的に進み続けるのだろうが，そのような環境の中で図書館員の自分に何ができるかを考えさせられた。結論としては，このような研修に参加することで最新の情報にアップデートし続けること，従来の慣習や常識にこだわることなく広い視野で適切な情報を提供できる努力を続けることが大切，と改めて気の引き締まる思いである。本講演で感じた想いを忘れることなく今後の業務にあたっていきたい。

最後に，今回初めて参加記執筆の機会をいただいたことを編集委員会の皆様に心より感謝するとともに，本研修会の企画・運営にご尽力いただいた関係者の皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

（原稿受付け：2020.6.19）